



TITLE:

徐乾學三兄弟とその時代：江南郷紳の地域支配の一具體像

AUTHOR(S):

川勝, 守

CITATION:

川勝, 守. 徐乾學三兄弟とその時代：江南郷紳の地域支配の一具體像. 東洋史研究 1981, 40(3): 480-511

ISSUE DATE:

1981-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153835>

RIGHT:

徐乾學三兄弟とその時代

——江南郷紳の地域支配の一具體像——

川 勝 守

はじめに

一 徐乾學の先世と三兄弟の官途昇進

二 康熙二〇年代の政治對立

三 徐乾學等告訴事件

四 郷紳徐氏の地域支配とその特徴

小 結

はじめに

『大清聖祖仁皇帝實錄』卷一四六、康熙二十九年六月癸酉（十四日）の條に、江南江西總督傅^{（圖）}拉塔^{（1）}が、大學士徐元文、原任刑部尚書徐乾學は一族家人を縦しいままに動かし、勢威を笠に着て納賄し、民害をなしたとする劣跡十五條を告發した。しかし、その結果は、康熙帝の「所參の本内各款は、寛に従つてその審明を免ず」という特旨で徐氏一族は不起訴になったことがみえる。

康熙二十九年は、吳三桂らの三藩の亂の鎮定後一〇年目であり、既に臺灣鄭氏も平定され、國內統一はなっていた。また、對外的にも、前年二八年（一六八九）、ロシアのピョートル大帝の使臣との間でネルチンスク條約が締結され、ロシ

アの南下を抑えていた。こうしてみれば、康熙二八・二九年ごろは、清の體制確立期と考えることができよう。康熙二八年、康熙帝は清皇帝として始めて、江南一帯への巡行、すなわち南巡を敢行したが、これも清の中國統一のセレモニーと考えられる。

徐乾學に對する告訴は、別の一件が二八年にも起っており、二九年の事件とともに、それらが康熙帝治下、清朝の體制確立期の最中に起きた事件であつたという點から、その政治史的意義の究明が要請される。すなわち、徐乾學らの告訴が數次にわたり、しかも兩江總督傅拉塔という滿州人實力者の告訴にもかかわらず、不起訴に終つたとなれば、この時期の清朝體制ないし清朝の滿州人政權説などの内容に再考を迫るものがある。

徐氏告訴事件は、實錄、東華錄に記述があるが、事件の詳細を知るに十分な原史料が檔案として残っており、先に一九三〇年、『文獻叢編』第四・第五輯に「徐乾學等被控狀」として活字印刷され、また、最近の一九八〇年に、中國第一歷史檔案館編『清代檔案史料叢編』第五輯、「徐乾學等被控魚肉鄉里荼毒人民狀」として校點をつけて公刊された。⁽³⁾この檔案史料により、徐乾學一族に對する告訴内容に徐氏一族の不正行爲の詳細が明らかになるとともに、徐氏の不正行爲が示す徐氏一族の郷紳としての領域的地域的支配の實態をも具體的に檢證できると期待される。

一 徐乾學の先世と三兄弟の官途昇進

1 徐氏の先世

康熙二、三〇年代に刑部尚書（乾學）、内閣學士兼禮部侍郎（秉義）、内閣大學士兼戸部尚書（元文）という高官要職となつた三兄弟を出した江蘇蘇州府崑山縣の徐氏は、清朝下の漢人官僚の家としてまず一級の家柄となつたが、その先世ほどの程度の家であつたのか。また、特別な問題としては、江南郷紳にとって極めて深刻な選擇を迫られた明清鼎革をどのよ

うに過したか、がある。

乾學三兄弟らの徐氏は、乾學らの六世の祖の申が鄰縣常熟縣より崑山に遷った。申は弘治十七年の舉人、刑部主事から湖州推官を歴任した。⁽⁴⁾ その子の一元は縣の諸生から太學生となり、選により交河縣（北直・河間府）主簿をつとめ、⁽⁵⁾ またその子の汝龍も諸生となったが、たまたま嘉靖倭寇の害を受け、家屋敷を焼かれて姻戚顧氏に居候したという。⁽⁶⁾ その子、すなわち乾學らの曾祖父の應聘は萬曆十一年に進士となり、太僕寺少卿にまで昇進した。⁽⁷⁾ 應聘の子は、萬曆三四年の副榜貢生永芳、同四三年の副榜貢生永美⁽⁸⁾ ほかがあったが、いずれもさしたる官職経験はなかった。その次の代、つまり乾學らの父の代となるが、まず、應聘の堂兄弟の應時の孫に當る開禧は崇禎元年に進士となり右春坊右中允となっており、⁽¹⁰⁾ その弟の開裕は崇禎九年の舉人であつた。⁽¹²⁾ 一方、應聘の長子永芳の子開遠も崇禎十二年に舉人となつたが、⁽¹⁴⁾ 乾學の父の開法、その弟の開緒らはいずれも廩例の貢生で官職経験はなかつた。

乾學の父の世代は、明清鼎革の時期に當つた。舉人開遠は順治二年の崑山城陷落の際、まず子の履愷、履恆を殺され、自身も三子の履愷とともに捕縛され殺害されそうになつたが、自分だけ助かり、その後、順治十六年湖南、寶慶府推官から福建江州府推官となるというように清朝に仕えた。⁽¹³⁾ しかし、同じ世代の開晉・開宏は明に殉じて清兵に抗して死亡し、⁽¹⁶⁾ 開任は清に仕えず隱逸の生活を送つたというように、明清鼎革に當つての徐氏一族の生き方は様々であつた。なお、開任は婁東（太倉・崑山）では吳偉業とともに「尤も史學を専らとす」といわれ、また、餘姚の黃宗羲もこれを稱して「近時、偽書の流行し、此の錄出でて、ほとんど廓清の功を收むるに幾からん」といつたという。⁽¹⁷⁾ 開任の史學がいかなるものか、もとより詳細は知れないが、これが明史編纂に携わつた乾學兄弟に何らかの影響を與えたことは確實であろう。乾學の父の開法も、明末に諸生から太學生となっており、甲申・乙酉の明清革命に際しては、清朝から明經を以つて薦も受けたが、疾と稱して出仕せず、歸郷の後に門を杜ざして生涯城市に足跡を残さなかつたという隱逸生活を送つた。⁽¹⁸⁾ なお、開法の妻の兄はかの顧炎武で、乾學兄弟は幼時よりその學風の薰陶を受けたという。⁽¹⁹⁾

こうしてみれば、乾學ら崑山徐氏の先世は數名の進士・舉人合格を出し、官職經驗を持ったものも居るには居るが、一般的には内閣大學士や六部尙書を輩出させた江南士大夫の家と比べればやはり寂しいもので、むしろ先世の多くは諸生クラスの讀書人が多かったとみておくべきであらう。

2 三兄弟の官途昇進

長子乾學は、崇禎四年（一六三一）十一月二日の生れ、順治十一年（一六五四）に蘇州府學より年貢生に選ばれ、同十七年京兆鄉試に合格し舉人となったところ、翌年江南奏銷案事件にまきこまれ、除名すなわち舉人身分の剝奪の處分を受け、官途昇進は一時閉ざされた。

次子秉義は、崇禎六年（一六三三）六月十八日の生れ、初名與儀、十五歳（順治四年一六四七）で太倉州の諸生となり、兄弟一緒に蘇州の文社で活動した。しかし、秉義も奏銷案に連坐し、黜籍となった。

三子元文は、秉義と年子の崇禎七年九月二八日の生れ、十四歳で諸生となり、兄らと蘇州の文社で勉強し、順治十一年に鄉試合格、ついで同十六年には會試に應じ、殿試に首席（狀元、一甲一名）で進士及第を果した。進士合格は二兄に先んじ、翰林院修撰に除され、エリートコースを歩むことが約束された。しかし、元文も奏銷案の被疑者とされて名が出、（「奸胥、公の名をその中に竄す」）、鑾儀衛に謫せられた。

順治十八年に發せられた奏銷案では、縉紳二一七一名、生員一萬一三四六名、計文武の紳衿一萬三五一七名が公職追放や科擧身分の剝奪等の處分を受け、これが清朝に對し何かと反抗的氣運をみせた江南鄉紳の抑制を狙った政治的大量處分であったことは疑いを容れない。徐氏三兄弟も、すでに進士合格を果した元文を含め、いずれも處分された。

奏銷案の處分解除は、一般的には事件後十五年も経った康熙十四年で、しかも權利の回復には捐納が必要とされた。しかるに、徐氏三兄弟の處分解除は目立って早く、はやくも事件の四年後には元文の無實が證明されて原官に復していた。

科舉應試を許された乾學は、康熙九年の殿試に探花（一甲三名）で進士及第となり、弟の秉義は八年の順天鄉試で舉人、十二年にやはり探花で進士合格となった。結局、三兄弟は狀元、探花という高位合格で、いずれも翰林院系の高官コースに就いた。

翰林院に入った三兄弟の任務は、主として史書の編纂であつたが、ここで三兄弟が修學中にどんな學問經驗を持ったか、學的交友關係と專攻學問の特徴をみてみよう。まず、幼時における家庭教育では、先述のように父の開法が諸生から太學生となり、明清鼎革の際明經を以つて薦を受けたとあることから、父から經學を學んだと思う。次に、やはり先述の如く、父の世代の親族には明末清初に吳偉業とともに太倉史學の雄とされた徐開任があり、また、母方の伯父にはかの顧炎武がいる。⁽²³⁾ 三兄弟は兩名から史學を學んだことは間違いない。

順治四年ごろ、乾學十七歳、秉義十五歳、元文十四歳で蘇州の文社に参加し、その領袖の長洲縣宋實穎（既庭、同、宋德宜（文恪）、同、彭龍（雲客）、吳縣の繆彤（念齋）らの推を受け、これより三徐の名が遠近に聞えるようになったという。このころの三兄弟の學風は古學を旨とし、百家に汎濫し、六經を根柢として「明理致用」につとめるものであつたという。

次に三兄弟の官職經歷を略述しよう。まず、進士及第の早い徐元文は、進士となるや直ちに翰林院修撰に除されたが、奏銷案のため一時昇進が中斷し、その後、康熙八年に國史院修撰、ついで祕書院侍讀に進んだ。同年秋には陝西鄉試を擔當し、翌年廷推により國子監祭酒となり、また經筵講官にも充てられた。以後、國子監祭酒にあること四年に及んだ。この間の元文の業績として明以來の國子監入監資格の手直しがある。納粟監生や歲貢生などの資格を大巾に制限し、その資格を各府學から一年おきに推薦された品行・文學ともに優秀な者と鄉試の合格者で舉人の選にもれた副榜貢生とに定めた。因みに康熙帝の祭酒徐元文に對する評言に「徐某、祭酒たりし時、規條嚴肅、滿洲（人）の子弟も教えに率わざるは、必ず擿責を加う。今に至るも猶お之を畏る。後來、那んぞ此くの如きを得んや」という。その後、康熙十二年京兆鄉

試の責任者となり、また庶吉士教習の任についた。この時、兄の秉義が庶吉士となったため、教習の職を辭そうとしたが、康熙帝は元文に兄秉義の教習のみを免じ、退職は許さなかった。元文は翌十三年五月に内閣學士兼禮部侍郎となり、ついで清の太宗實錄編集副總裁となった。翌十四年四月には翰林院學士兼禮部侍郎、日講官起居注を擔當し、五月再び教習庶吉士を兼ねた。このころ、康熙帝への進講は桐城の張英と分擔した。康熙十八年以後、明史の監修に當ったが、閣臣勳臣以外の學士でこれになったものは元文だけであった。元文は、故明の給事中李清、主事黃宗羲、副使曹溶、主事汪懋麟、布衣黃虞稷、諸生姜宸英、萬言等を推舉したが、部議の反對にあつた。しかし、康熙帝は元文の提案を支持し、李清らを召そうとしたが、李清、黃宗羲、曹溶らは老を以って至らなかつたという。元文は十九年に都察院左都御史、二八年に文華殿大學士兼翰林院事となり、この間に戸部尙書も兼ねた。元文は翰林院官のみならず監察官たる都察院の御史や財務官僚たる戸部尙書を勤めたが、これは彼が單なる學者官僚でなく、實務官僚であつたことも示している。事實、三藩の亂鎮定後に、三藩の虐政として粵の五害（鹽埠、渡稅、總店、市舶、漁課）、閩の四害（鹽稅、報船、冒擾驛夫、牙行渡稅）、滇南の四害（勲莊、園田、礦廠、兵多）などを指摘し、その對策を講じたことや、戸部尙書に就いた際、錢穀の帳簿を調査するのに胥吏の手を假りなかつたと稱されたことなどからも、その一面を窺うことができる。

次に、長兄の乾學は、康熙九年に一甲三名（探花）で進士合格後、翰林院の編修、同十一年に蔡啓傳の副査として順天鄉試を主つたが、この試で蘇州の韓菼を抜貢した。しかしこれが因で蔡啓傳とともに黜革されたが、やがて復官した。その後、翰林院の左贊善に遷り、日講起居注官を経て、明史總裁官、侍講學士に累遷し、康熙二十三年冬に詹事、二十四年には南書房（翰林院）に日直して、内閣學士に擢ばれ、大清會典、大清一統志の副總裁、教習庶吉士となった。ついで禮部侍郎となつて經筵に直講し、二六年には左都御史に遷つて、その後、刑部尙書となった。乾學は性格が侃侃、豪傑肌でよく人と交わつて友人が多かつた。彼の事蹟で注目されるのは、鄉黨のために善事を行うことが多かつた點である。故友朝士の葬儀を行い、秉義・元文の二弟とともに、朱子の社倉法に倣つて世德倉を立て、穀二千石を貯えて貧民を濟つた。同時に

同善會⁽²³⁾を組織し、貧民墓地をつくり、また、千畝の義莊をつくって一族の助けとするなど、徐氏一族の宗族結合を強化した⁽²⁴⁾。

秉義の經歷は、康熙三〇年に入ってからが目立つので、ここでは割愛する。

二 康熙二〇年代の政治對立⁽²⁵⁾

1 康熙二十七年の二月政變

康熙二〇年十一月、湘粵川三路の軍が雲南に入り、吳三桂の子世璠は自殺し、三藩の亂は平定された。翌二一年正月十四日、康熙帝は乾清門に御し、内閣大學士、内閣學士、各部院等の堂官、翰林學士、講讀日講、編修、檢討、詹事坊局、科道掌印官等の九十三員を集めて宴會を催し、以後の歡忭暢飲、笑語の禁を解いた。同年二月には翰林院侍講王鴻緒が疏參して、楚人朱方旦の異端的儒教が摘發された。同年の五月、康熙帝は治政の方針を「清慎勤」の三大字に約し、内政の充實が喧傳された。一方、翌年十月には祭酒王士禎の請により國學所藏の十三經注疏と二十一史の刻板が修理され、また、このころ總督・巡撫に各地方の明南監本の調査が命ぜられ、儒學尊經閣にその版木が收貯された。こうして康熙帝の「文化」政治は進展したが、一方では康熙帝の新政下でも存在するボス政治の弊害は頂點に達し、康熙二十七年に入るや、漢人言官の糾彈が始った。

すなわち、康熙二十七年二月六日、御史郭琇は、黃河治水の總責任者、河道總督靳輔と當該地區の巡撫等官の彈劾を行つたのに續き、大臣たる大學士明珠、同余國柱らが背公結黨して納賄營私につとめていると糾彈し、その實跡を次の如く指摘した⁽²⁶⁾。

一、凡そ閣中の票擬は、俱に明珠の指麾^{さしず}、輕重も任意で、余國柱が其（明珠）の風旨^{いこう}を承け（て行い）、即舛錯^もが有つて

も、同官は敢て駁正し莫い。皇上は聖明で、時に詰責が有るが、乃漫として省改が無い。即ち御史陳紫芝が湖廣巡撫張汧を參劾した疏内に、並に保舉の員を議處せんことを請うが如きも、皇上は九卿に面諭し、應に一體に嚴に議處を加うべきに、乃ち票擬は竟に之に及ばざれば、則ち張汧を保舉せる原屬の指麾、即ち此れ見る可し。

一、(要旨) 明珠は皇帝の旨を勝手に増添し、何でも自分の手柄とし、群心に結黨して貨賄を挾取している。

一、明珠の結連んだ黨羽は、滿洲は即ち戸部尙書佛倫、刑部侍郎葛思泰、及びその族姪の工部侍郎傅臘塔、刑部侍郎席珠等で、漢人の總攬は余國柱で結んで死黨を爲し、寄るに腹心を以てす。向時、會議會推は皆佛倫、葛思泰等の把持するところ、余國柱は更に之が囊橐と爲り、惟だ命を是れ聽き、但だ徳を私門に戴くを知るのみ。

一、凡そ總督・巡撫・布政使・按察使が缺出すると、余國柱等は展轉販鬻せざるは無く、必ず求めて欲を滿たすに及んで後に止む。是を以て督撫等官は愈よいよ賸剝に事め、小民困を重ぬ。今天下聖主に遭逢し愛民は子の如くも、民猶お未だ給足せざるは、皆貪官搜索して以て私門に奉ずるの致す所なればなり。

一、(要旨) 康熙二三年、學道報滿の後、賄賂が横行し、士風文教が大壞した。

一、(要旨) 河道總督靳輔と明珠、余國柱らは結託して工事費を横領着服している。

一、(要旨) 明珠、余國柱らが科道官の内陞、出差の考選を左右する結果、言官は明珠らの牽制を受けている。

一、明珠は自ら罪戾を知り、人見ゆるに輒ち柔顏甘語を用い、百般款曲するが、陰に驚害を行い、毒を意い險を謀り、最も忌む者は言官、その奸狀を發かれるを恐る。佛倫總憲たりし時に當り、御史李時謙の累奏旨に稱い、御史吳震方頗る參劾有るを見て、即ち事に借りて排陷し、聞者をして駭懼せしむ。

御史郭琇の糾彈は康熙帝の支持するところとなり、同月十一日の吏部に下した上諭には、人事任命權の皇帝への集中、並に人事の公正化と不正の防止を示した。關係者の處分は、大學士明珠、同、勒德洪が革職、同、李之芳が休致回籍、同余國柱が革職、吏部尙書科爾坤が原品で解任、戸部尙書佛倫と工部尙書熊一瀟が解任、というそれぞれの處罰が出た。こ

こに内閣は二名の滿人大學士、二名の漢人大學士が革められ、五名の大學士中残こるは漢人大學士王熙一人となり、大巾改造となった。なお、吏部尙書の科爾坤は康熙帝の第一皇子の妻の父であり、佛倫とともにこの時期の有力滿人官僚であったにもかかわらず失脚した。⁽²⁹⁾

明珠黨の失脚は、正しく康熙二十七年二月政變とも呼べるくらい規模があつたが、所詮は内閣―六部の高級官僚による公權の私物化現象で、康熙帝の一喝で霧散すべき黨羽であつた。

續いて同年三月には、御史陸祖修は、「河道總督靳輔、身は外に在ると雖も、九卿と呼應すること甚だ靈なり。會議の時、尙書佛倫、科爾坤等は公議を顧みず、河臣に左袒す。竊かに思うに河工・屯田の二事は于成龍自ら成算が有り、應に于成龍の京に到り明確を面奏するを俟つて、加うるに乾斷を以てするを請うべし」と言い、審査が始つた。⁽³⁰⁾ここに康熙帝は、靳輔・于成龍らの主張を比較検討した。その後、御史郭琇や新任工部尙書李天馥らの意見も提出され、結論として于成龍の主張が採用され、靳輔の意見は斥けられた。それを受けて、吏部は靳輔・慕天顏を革職とし、孫在豐、佛倫もまた降調された。

ところで、先の二月政變後、内閣大學士に登用されたのは梁清標と伊桑阿であり、六部では李天馥が工部尙書に、張玉書が兵部尙書に、徐乾學が刑部尙書にそれぞれ就任した。徐乾學は前年の二六年九月に都察院左都御史となつており、二月政變で何らかの役割を演じたことが推測されるが、乾學はそれ以前からも科爾坤や余國柱らの明珠黨とは意見を異にすることがあり、⁽³¹⁾二月政變で明珠黨が失脚したことを受けて、刑部尙書となつたものと思う。時人の衆くは、明珠らの失權は乾學が之を主つたというものも居た。また、明珠らを北黨、乾學らを南黨とし、「時に南・北黨の目有り、互に相ひ抨撃した」とも言われた。⁽³²⁾

2 康熙二八年の九月政變

康熙二八年九月、左都御史郭琇は、再び康熙帝側近官僚の糾弾を行った。すなわち、原任少詹事高士奇、左都御史王鴻緒らが植黨營私、皇帝の權勢を假りて財物をかすめとっている（「招搖撞騙」）というもので、今回の糾弾は、同じく近臣といつても、滿人有力官僚は含まれず、専ら漢人官僚で、翰林院系の文人官僚が對象であるのが特徴である。

高士奇らの罪狀の一。高士奇は出身微賤、その始めや徒歩で上京し、監生となったが、その字學が頗る工みであることが帝の目にとまり、資格に拘らず翰林に擢補され、南書房供奉に入つたが、仕事はもとより文章を考訂するに過ぎず、國政に與ずかるなどんでもなかつた。しかし、次第に大臣と結納諂附するようになり、攬事招搖して私腹を肥した。内外の大小臣工も士奇の名を知らぬものはなく、南書房で辦事する者の中で高士奇だけが名聲を博している。高士奇らの罪狀の二。高士奇は王鴻緒と死黨を結び、科臣何楷とは義兄弟となり、翰林院陳元龍とは叔姪の關係となり、鴻緒の實兄項齡とは子女の姻親といった人的關係を結び、相互に同盟をつくり、外には勧誘を行う。そこで督撫以下の地方官や中央の諸官は皆、（高士奇）、王鴻緒、何楷を寄るべき居停とし、餽や賄賂は千萬を數え、この黨護に屬さないものの常例の挨拶料を「平安錢」といった。贈賄者は士奇が供奉の日久しく、勢焰も日に張つて、人皆これを「門路眞」というところ、士奇は自分が勢を笠に着て人の財物をかすめ取っているのを忘れ、自ら「私の門路は眞」と思っている。

高士奇らの罪狀の三。光棍俞子易は北京で惡事を重ねること數年、事の露呈を恐れて潛かに直隸天津、山東濰口地方に通れた。その際、北京虎坊橋に所有する瓦葺の家屋六十餘間、その價值八千金を、士奇に餽送し、照拂を託した。この他順城門斜街はか各處の房屋も、總て士奇の心腹が名義を出して置買したもので、何楷が代つて租を收めている。北京の打磨場には士奇の親家の陳元師と夥計の陳季芳が綬號を開張しており、各處に寄頓した賄銀資本は約四十餘萬兩となっている。他方、士奇は出身地の平湖縣に田産千頃を置買し、大いに土木工事を興こし、花園を修置した。杭州の西溪に廣く園宅を置き、蘇松淮揚で王鴻緒らと合夥して生理し、また百餘萬金を下らない。竊かに思う

に、書生で口に餉する窮儒が、今忽ちに數百萬金をもつ富翁となった。試みに問う。金はどこから来るや。各官に求めたものではないか。しからば各官はどこから工面したか。國帑を侵したのでなければ民の膏を剥りとったものだ。これ士奇らが眞に國蠹、民賊であるところだ。

高士奇らの罪狀の四。皇上は聖明で、その罪を洞悉している。ただ、各館史書の編纂が未だ完らないから、竣事まで解任せず、かかる矜全の鴻恩は至極である。しかるに士奇らは過を覺つて自新し、悛めようとしな。南巡の際、康熙帝は餽送・賄賂を嚴禁し、違犯者は軍法をもつて治罪することにした。ところが士奇・鴻緒は死をも畏れず、淮揚等處で王鴻緒は各府廳の各官に招攬して黄金を潛かに士奇に饋るよう約束させた。これ、士奇らが君を欺き法を滅ぼし、公に背いて私を行うことである。

高士奇らの罪狀の五。更に駭く可きことは、王鴻緒、陳元龍は鼎甲出身、嚴然たる士林の翹楚であるのに、竟に清議を顧みず、人に壟斷を作しても恥とせず、大臣に媚びて人の屑としないところに甘んじ、かつ辱づかしめられたと思われない。苟か富貴を圖つて、名教を敗傷した。どうして朝廷を玷し、當世の士たるを羞じないか。これを總じれば高士奇・王鴻緒・陳元龍・何楷・王項齡は豺狼がその性、蛇蝎がその心、鬼蜮がその形である。

高士奇グループに對する御史郭琇の糾彈も康熙帝に支持され、同グループは全員休致回籍の處分に附され、失脚が確定した。このグループは、第一に先述の如く漢人のみの翰林院官僚で構成されていたこと、第二にその出身地がいずれも浙江と一部江蘇に限られた江南官僚のグループであることが特徴である。

それでは、徐乾學兄弟はこの高士奇グループとどのような關係にあったか。江南出身の翰林院官僚である點など共通する點が多く、また、同グループの糾彈があつた翌月には徐乾學に對する糾彈も始つたことからみて、何らかの關わりのあつたことは想像される。

三 徐乾學等告訴事件

康熙二八年十月、副都御史許三禮は原任刑部尚書徐乾學を疏劾しているが、その内容は概略次の通りである。乾學は品行を顧みず、身を律すること嚴ならず、罪臣張汧⁽³⁸⁾の供を受けた。乾學は長く在京、修史を事とし、禁廷に出入し、高士奇らと表裏して行動した。乾學の子の試御史徐樹穀の就官も成例に違つたものではなく、その考績は全く不明瞭、明らかに恃むところがあるもの。乾學の弟秉義や原任禮部尚書熊賜履は人物良好、學識もあるから乾學に代わるべきだ、と。かかる許三禮の糾彈に對し、康熙帝は乾學の回奏を求めた。

乾學の辯解。許三禮がいう罪臣張汧から供する所があつたという點については、臣は全く一錢の受け取りもない。高士奇との關係も單にともに史書の檢討を行つたり、御選の古文を校讐したりする以外には、全く干渉はなかつた。子の樹穀の考選についても疑いを容れるところは斷じてない、と辯解した。

許三禮の疏劾文と乾學の回奏とはともに吏部に下されて審査され、その結果、吏部は、乾學の招搖納賄は實據なし、また樹穀の朦朧とした考選といつても確證なしとし、かえつて許三禮は降二級で調用すべしと決定した。

これに對して、許三禮はひるまず、徐乾學一族の不正を九款に分けて復疏した⁽³⁹⁾（これを史料甲とする）。

甲①一、乾學は丁卯（康熙二六）鄉試、戊辰（同二七）會試で、外に在つて招搖し、門生親戚、有名な文士が各々關節を與え（賄賂を納れ）、務めて中式を期した。蘇州府貢生何焯は乾學門下に往來したが、深くその弊を悉し、特に會試の墨卷（原答案）に序文を作り、寓言で諷刺した。乾學聞知するや、即ち書舖に向つて序を將つて抽燬させ、江蘇巡撫に囑託して何焯を訪拿させたが、今に至るも未だ結していない。

②一、乾學は元本銀十萬兩を發し、鹽商項景元^{わた}に交して揚州で貿易させ、毎月三分利息をとつた。本年七月間かの孫婿史姓の家人李相を景元に押回させて八月二十四日北京で算賬し、共に本利とも十六萬兩を結算した⁽⁴⁰⁾。又、布商陳天石

も新たに乾學の元銀十萬兩を領し、北京の大蔣家胡同（こうじゅうしや）で當舖を開張し、その餘の銀號錢桌もみな元本に發して放債し、禁に違つて利息を取り、怨聲は道に満ちている。

③一、乾學は門生李國亮が江蘇按察使と爲り、代りに（徐氏の家を）料理（料理）した。國亮は劉管家を差して銀一萬兩を送り乾學の管家吳子彥、吳子章に交して收めさせた。節を過ぎたときの送銀四百兩、小禮四十兩、誕生日（十一月二日）の送銀一千兩である。吳子彥は張汧の事が發したことで逃回したので、その實弟の子章に收めさせ、徐元文入閣の辦事（じゅんば）とした。國亮は管家劉姓を差し賀禮五千兩を送り、吳子章に交して收繳（うけと）せた。

④一、乾學は光棍徐紫賢、紫書の二人を姪とし、通同（ひつぱりあて）扯緯（ひつぱりあて）して、得贓萬を果ぬ。紫賢・紫書は現に欄面胡同（こうじ）で花園房屋造った。書辦の子が一朝で富貴となった。金はどこから來たか。乾學の贓物の半はその手に出た。

⑤一、乾學はその弟の入閣の後、親家の高士奇と更に招搖を加え、以って「余秦檜（秦檜のような余國柱）を去らせたら、徐嚴嵩（嚴嵩のような徐元文）を來させた。乾學は龐涓に似たり、是は彼の大長兄」の謠言が立った。また「四方の寶物は東海（徐乾學）に歸し、萬國の金珠は澹人（高士奇）に送らる」の對聯は京城（みやこ）の三尺の童子もみな知っている。もし乾學が苞苴（わいしゅ）を絶したとすれば、なんでこんな醜語があらうか。

⑥一、乾學は弟宏基を各省に遊歴させ、各地の富豪から寄附をせびり、河南磁州・彰德府では逗留一年有餘、放賭宿妓して、良民は害を受け、怨聲は道に載る。

⑦一、乾學は御史傳感丁の北京邸宅一所を買い、價銀六千餘兩、學士孫在豐の北京邸宅一所、價值五千五百兩を買ったほか、慕天顔の無錫縣の田一萬頃、京城繩匠胡同（こうじ）、半截胡同（こうじ）と横街の新造房屋甚だ多くを買い、枚舉することはできない。蘇州、太倉、崑山、吳縣、長洲、常熟、吳江等の州縣は、俱に徐府の邸宅田地である。

⑧一、乾學の子徐樹屏、徐樹聲は甲子（康熙三年）の鄉試で禽緣（因縁）で舉人となったが、弊が發見され身分を黜革された。行止虧有るは、此れより甚しと爲すは莫し。

⑨一、乾學は身は國恩を受けながら、乃ち敢て桃李を一門に植え（人材を一門に養成し）、腹心を九州に播まき、横行聚斂、枉直を顧みず、之に順えば生き、之に逆えば死す。勢は中外を傾け、權は當時に重く、朝綱紊す可く、成例滅ばす可し。

許三禮の再度の糾彈復疏に對し、大學士徐元文が辯解を奏上した。しかし、それは許三禮の主張が事實に基づかないと強辯するだけのことで、甚だ説得力に缺ける。それでも、康熙帝の裁決ではまたしても、徐氏は不起訴、許三禮は罪ありとされた。

ところが、徐乾學は許三禮の糾彈に弱り、年六十歳という老、精神の衰耗を理由として一時の歸郷を願った。これに對し康熙帝は、「卿は學問淹博、各館書史を總裁し、著しく勤勞有り、墓參に歸省するを奏請するに、情詞懇切なるを覽る。回籍に假るを准すが、書籍は著して隨帶し編輯せしむ」という旨を下し、また、御筆の「光燄萬丈」の匾額を賜った。⁽⁴¹⁾

翌年二九年四月、徐乾學らが手がけていた大清會典が完成、その直後の六月に兩江總督傅拉塔は、江蘇巡撫の洪之傑と原任刑部尚書徐乾學、大學士徐元文及び彼らの子姪の穢跡數箇條を列舉し、糾彈を加えた⁽⁴²⁾（これを史料乙とする）。

乙①一、康熙二八年、徐元文大學士に陞任し、洪之傑諂媚して、金字大匾一方、旗桿二根を製り、旗上に金鐫の『瑞葉金甌泰開玉燭』八字を書き、督糧同知姚應鳳に委ねて徐元文門前に齎至し樹立した。復た賀儀一萬兩を送り、徐元文の子學人徐樹本が親ら收めた。

②一、康熙二八年、原任松江府知府趙寧は徐元文門下に投拜し、銀一千兩を餽り、元文の姪樹屏・樹敏が親ら收めた。

③一、康熙二八年、松江・江寧・常州三府採買の青藍布を戸部に解り、價を少くして多くを買った。（差額の）銷銀一萬四千餘兩を、洪之傑、趙寧、徐樹本等が分肥した。

④一、徐元文の子樹聲は、京より巡撫衙門に到るや、要緊な密信が有ると稱し、開門やや遅れるに因り、門吏を喝打

- し、洪之傑きまつけ聽聞するや、忙あわて即中門を開し、鳴鑼擊鼓し樂を作して迎進むかえすすむす。衙役みちやくも路人ちゆうじんも皆恥笑ちしやうを爲す。
- ⑤一、洪之傑は康熙二八年、重犯減等の案件内で吏部の會議は革職としたが、皇上の寛宥を蒙り、降級留任となった。しかるに元文・乾學は鴻恩を冒かし、以て己が力と爲し、洪之傑は銀二萬兩をば原任松江府知府趙寧に送らせ徐樹本が收めた。
- ⑥一、康熙二八年、蘇州閶門外の居民欽涿・欽鼎丞は彼此爭訟していた。徐樹敏は欽鼎丞家の裕を見て、巡撫に囑託して欽涿・欽宸樞をして（欽鼎丞を）誣告せしめ、欽鼎丞の銀一千兩を詐し、かの家人徐孔昭・李孔章に交與して兌收うけとらせた。
- ⑦一、徐樹聲兄弟は前に蘇州府承天寺内瓊琅山房に往き、惡僧等富厚をみ、銀一千兩を詐し、巡撫に囑して瓊琅山房の僧のみを止留し、餘房の僧は盡く皆驅逐し、後に逐われた僧と衆くの百姓は惡僧を留め好僧を逐出したとし、公憤怨恨こんげんしている。
- ⑧一、徐樹本は王緝植の母を唆かして同縣の監生李端匏が久しく親を葬らなかつたと告發させ、李端匏の銀四百兩を詐得した。
- ⑨一、康熙二九年、蘇州葑門外の果子行の陸雲椿、韓雲若の二人が行業買賣しやうばいを争っているで、徐樹本は詭いつはりつてかの親の湯機先、湯在治に生理けいえさせ、陸雲椿の銀二百四十兩を勒得した。
- ⑩一、徐樹屏は光棍徐長民を庇護し、徐長民が仇家の生員黃中堅の聲言せいごんで必ずその害を受けたとし、(將)黃中堅の金四千兩、田の六百兩に抵るを嚇詐した。又、黃中堅を光棍徐長民に交與し、毆らせ指を折らせた。
- ⑪一、徐樹聲・樹本等ほかの銀米を六月より放出し、十月に交收し利息銀は毎兩五六錢米は每石五六斗を起こし、重利剋剋きやくきやくし、貧民が償還する能わざれば、即ち家人を差して打罵させ、貧民受け難く、妻子を典賣するに到る。その勢力を畏れ、敢て理を告すものはいない。

⑫一、徐乾學、元文はかの子姪の田地を均しく別人名義に填入し、毎年錢糧を拖欠し、官員の議處にもかかわらず、勢を以て欺壓し、終に完納しない。所有^{あらゆ}る崑山縣の知縣は總べて錢糧（未完）のために革職降級とされ陞任できない者が多い。

⑬一、徐乾學は本年三月内に回籍したが、四月には名譽を汙らんと欲し、蘇州府貢監生胡三錫、周鄉詩等に囑託して巡撫洪之傑に具呈させ、違例にも（自己の）生祠を虎邱山上に建造しようとした。

⑭一、徐樹本・樹聲・樹屏・樹敏の家人徐孔昭・高彬甫・吳漢周・曹爾玉・蘇雲生・金正昌等は蘇州城に往來し、輪番^{かわ}更替^{がわ}、馬吊演劇をやり晝夜を虚^あかず、崑山知縣の船夫を勒索し、大小衙門の事件を承攬^{うけか}す。蘇州府城東に毛上列、西城に黃聖微、閶門外に顧思誠が有って、處處差遣^{かねも}して有業^{かねも}の人を打聽^{たんでい}し、信息^{しやうそく}を捏告す。蘇州の民人皆拉牽擺渡船^{しやうけんわだてぶね}と稱し、怨恨切齒、奈何す可くもなし。

⑮總じて、徐元文等至富至貴、尙お足るを知らず、皇上の仁恩を以て、邀えて己が力と爲し、權勢を招搖して、通省の官民を恐嚇し、是非を顛倒し、銀錢を得受す。又縱まに、虎狼の如き子姪家人を放ち、大小衙門に出入させ、地方を擾害す。又、復た爭訟を唆使^{そそのか}し、重利^{こゝろ}で民を累す、惡徒を收めて羽翼と爲し、世世相扶けて以て富貴を圖る。而るに地方の大臣、巡撫洪之傑の如きは、又趨炎附勢、媚を獻じて應附を爲し、有司皆畏れ、逢迎せざるは無く、官既に進迎せば累は小民に及ぶ。

傅拉塔の糾彈に對しても、康熙帝の旨は、「參する所の各款は、寛に從つてその審明を免ず。徐元文は休致回籍に著かしむ」であつた。要するに康熙帝の指揮權發動ともいふべき處置で徐乾學一族の告發は不起訴となつたのである。しかし、徐氏の郷里崑山縣を中心として江蘇各地の士民は傅拉塔の糾彈を契機として、以後二九年九月から三二年十一月まで、徐氏一族の不正を告發し續けた。

四 郷紳徐氏の地域支配とその特徴

1 郷紳徐氏の權力構成

中國第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』第五輯「徐乾學等被控魚肉鄉里荼毒人民狀」（以下『檔案』徐乾學と略す）23
 《沈愨呈控徐乾學一門貪殘毘邑狀 附條陳》には、「縉紳有れば、則ち縉紳の宗族姻戚有り。縉紳有れば、則ち縉紳の狼
 僕打降有り。縉紳有れば、則ち縉紳の門生清客、^{および}以及附勢趨炎の土官猾吏有り」とあり、郷紳權力の構成は、(A)宗族・
 姻戚 (B)奴僕（家人・棍徒（打降））(C)門生清客・土官猾吏（地方官、胥吏、衙役）ということになる。(A)―(C)を史料
 に確認してみよう。

第一表 『清代檔案史料叢編』第五輯「徐乾學等被控魚肉鄉里荼毒人民狀」目録

番號

表題

年月日 『文獻叢編』

1	崑山縣民邵德呈控徐乾學子姪姻親勾結官宦屠民詐財狀（附粘單）	康熙二九・九・三	一
2	太倉州民熊燮呈控徐振紱等恃宦殘民狀（附粘單）	二九・九・五	二
3	太倉州孀婦金氏稟控徐與喬義子吳素傳竊產逼嫁狀（附憲駁）	二九・九・六	一六
4	崑山縣貢生沈愨再控徐秉義等謀占田房逼死人命狀	二九・九・七	三
12	黃以人稟控徐宦叛僕搶財劫媳狀	二九・九・一六	
14	馬雲卓稟控鄒君恆倚侍徐宦制籌坑銀占房狀	二九・九・二六	
15	崑山縣民阿培稟控徐宦至戚王子來詐財斃命狀（附粘單）	二九・九・九	
16	揚州府萬民稟控知縣王維翰結納徐乾學之子占財害命狀	二九・一〇・四	四
17	常熟縣孀婦吳氏稟控地棍毆殺男命賄投徐君甫挾縣不究狀	二九・一〇・一七	
21	無錫縣監生華原淳告徐乾學詐銀逼命狀	三〇・八・三	五

22	崑山縣民秦旋呈控徐乾學主使豪奴霸產掘坟狀	三〇・八・三	
23	崑山縣貢生沈愷呈控徐乾學一門貧殘崑邑狀(附條陳)	三〇・八・三	
24	嘉定縣民秦旋告徐乾學子姪謀占田房狀(附粘單)	三〇・九・二	九
25	附居太倉州生員張恂如呈控徐乾學炙詐婪贖逼死父命狀(附書冊)	三〇・一〇・一六	七
26	休寧縣商人吳淇稟控徐乾學冒詐騙銀兩財物狀(附粘單)	三〇・一〇・一八	一〇
27	崑山縣民倪培呈控徐宦豪奴吳漢周等謀財害民狀	三一・一・二七	一一
28	崑山縣民陳秉彝呈控陳秉衡倚恃岳父徐舟六奪產逐兄狀(附粘單)	三一・一・二八	
29	崑山縣民朱征呈告朱三盜嫂淫奔投入徐府典史受賄不緝狀	三一・一・二八	
30	崑山縣民范卿呈控徐元文家奴顧君甫倚勢強占民房狀	三一・一・二八	一二
31	太倉州孀婦張氏呈控汪偉等倚恃徐宦籍產斬嗣狀	三一・一・二八	一二
32	嘉定縣民褚亮稟控徐宦管家褚昭仗勢害民狀	三一・一・六・一	一四
34	豐縣民秦玉朋告徐乾學惡僕司元等斃命霸田狀 (ただし、徐氏一族に關するものだけを抄録)	三一・一一・三	

(A) 宗族・姻戚 史料甲・乙にみえる徐氏の宗族の姓名は、原任刑部尚書徐乾學・大學士徐元文のほか、乾學弟宏基(甲⑥)、乾學子樹屏・樹聲(甲⑧)、元文子樹本(乙①③⑤⑦⑧⑨⑪⑭)、同樹聲(乙④⑦⑪⑭)、元文姪樹敏(乙②⑥⑭)、同樹屏(乙②⑩⑭)、乾學姪徐紫賢・紫書(但し光棍、甲④)などである。しかし、乾學弟宏基とは誰か、他の史料の確認が得られない。なお甲の記述には樹聲を乾學の子とするなど不正確なところがあり、必ずしも信が置けない。

『檔案』徐乾學は徐氏關係の檔案二二件を收め、各表題は第一表の如くであるが、ここに徐氏の宗族として名の見えるのは、大學士嫡堂弟監生徐昭夏⁴³(1)、尚書子黜革舉人徐樹屏(1・23・24)、徐元文姪粟監徐振紱(2・3)、その父徐與喬(3)、與喬子徐昌(3)、春坊徐秉義(4・23)、開任・世謙・履忱・與華・奕憲・錦・泓志(以上4)、徐宦惡姪徐君甫(17)、乾學族山西鹽院徐誥武(25)などが擧げられるが、特に、23『沈愷呈控徐乾學一門貧殘崑邑狀』には、十五宦とか一門十五貴とよぶ革職刑部尚書徐乾學以下、休致大學士徐元文、欺君假病春坊徐秉義、原任御史降調按察司經歷徐

樹穀、現任行人司徐炯、貢緣中式磨勘黜革舉人徐樹聲、丁卯貢緣舉人徐樹本、現犯聞案詐贓擬絞公子徐樹敏、磨勘黜革舉人徐樹屏、辛未貢緣進士徐樹庸、奏銷黜革進士徐與喬、納貢考職今冒荒革職積惡訪犯徐與華、歲貢考職履忱、壬子貢緣舉人徐世濂、現犯嚴甫命案武舉徐錦が列擧されている（徐氏系圖1参照）。

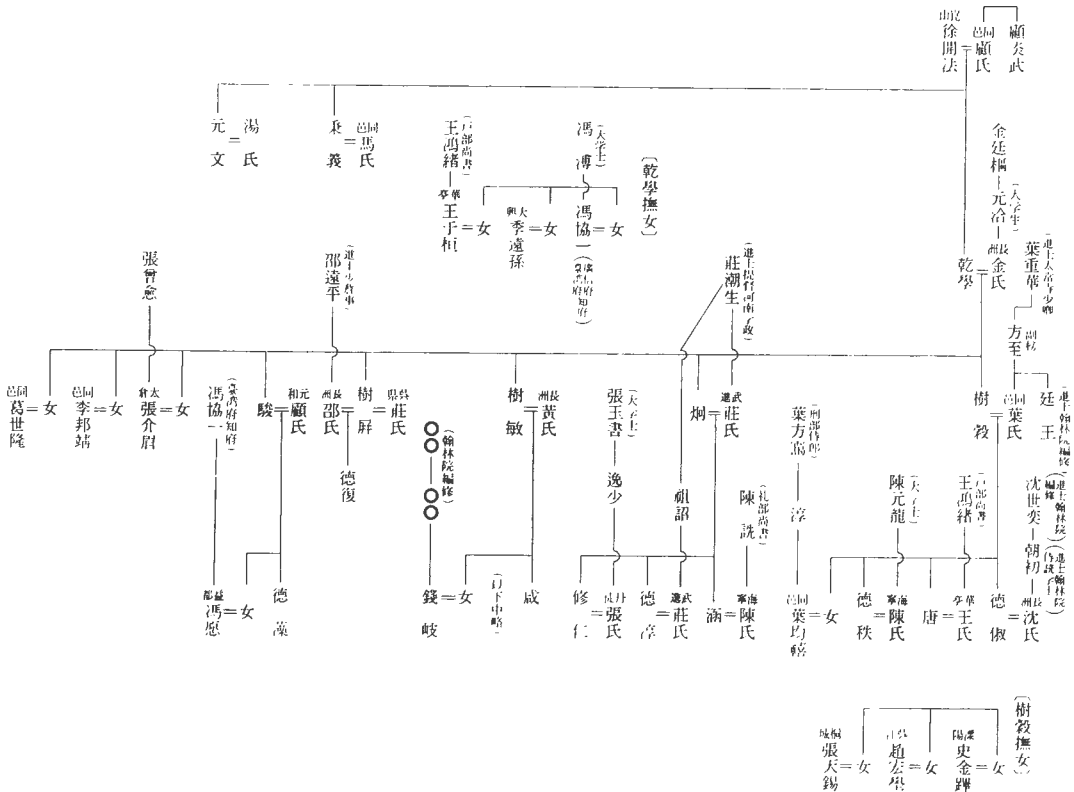
次に徐氏の姻戚では、甲・乙史料には乾學の孫婿史氏（甲②）、同親家高士奇（甲⑤）とあるだけである。『檔案』徐乾學には尙書婿漢陽令張介眉・その父即尙書親翁の張曾憲^{（太憲）}・葉宦（葉生員家、葉廷玉）・徐翰林秉義姪婿蔡玉森・徐昭夏妻葉氏（以上1）、錢來琛次子錢源係徐元文表姪婿（2）、本府教習知縣王維翰……獻妹於崑山徐乾學公子爲妾（16）とある。いうまでもないが、『檔案』文書にその名を擧げられた徐氏の姻戚は、徐氏の權力を頼ろうとするもので、例えば揚州府教習知縣王維翰は乾學の子に妹を獻じて妾とし、「權豪と結納」しようとする（16）。また、白衣中書（粟監加納中書）錢來琛は次子源の妻に徐元文の姪女を迎えたほか、長子瀧には太倉の王翰林挾の女、三子漣には蘇州長洲の宋翰林德宜の女を求めたが、それは「俱に（女家の）勢を恃みて重賄囑托し、俱に南場（御試場）に赴いて、舉人を貪買する」ためであるという（2）。なお、これと同じレベルのことは擬制的宗族（養子）關係の形成たる通譜にみられる。『檔案』徐乾學25には「徐志貞即盛世貞、太倉州人、徐姓に頂^{つは}て進學す」とある。

ここで試みに徐氏の姻戚關係を乾學の世代から二代目までを一覽にしよう（徐氏姻戚系圖2参照）。乾學、秉義、元文ともにその妻の家はさしたる官僚を出した家でない。次は乾學長子の樹穀の妻葉氏は兄が廷玉（葉生員家・葉宦）父副榜貢生方至、祖父が崇禎元年進士太常寺少卿葉重華であり、同次子炯の妻は武進莊氏でその父は順治六年進士、河南學政莊潮生であるくらいが注目される。しかし、二代たつて乾學の孫の代となると、樹穀の女は同邑の刑部侍郎葉方霽の孫に、炯の女は長洲の禮部尙書韓炎の子に嫁し、一方、樹穀の長子德倅は長洲の翰林院編集沈世奕の孫で同侍讀學士沈朝初の女を妻とし、樹穀の次子唐は彼の戸部尙書王鴻緒の女、同三子德秩は大學士陳元龍の女、炯の長子涵は海寧の禮部尙書陳詵の女、同三子修仁は丹徒の大學士張玉書の孫女をそれぞれ妻に迎えた。以上から、崑山徐氏は乾學兄弟が昇進した康熙二十年代

山崑
徐開法

邑同顧氏

顧炎武



以後、江南出身の主要な高官の家と姻戚關係を結んだことが知られる。ただし、これらは葉宦を除けば『檔案』に全く登場しない。

(B) 奴僕・棍徒 甲の③に徐乾學の管家吳子彥・吳子章とあるが、管家とは家事家政を管理する奴僕をいう。乙⑥には徐樹敏の家人徐孔昭・李孔章、同⑭に徐氏家人徐孔昭・高彬甫・吳漢周・曹爾玉・蘇雲生・金正昌が擧げられている。『檔案』徐乾學の各文書は徐氏の奴僕の活動を詳細に記述しているが、徐樹屏の豪奴張乘六(1)、徐振絨の豪奴胥二(2・3)、徐秉義の豪奴徐復(4)、徐乾學の豪奴金洪聲、同乾學の豪奴徐仰田・徐吉甫・徐慶甫・沈悅公(以上22)、同乾學の豪奴任政・高大・張相(以上25)、徐元文の豪奴顧君甫(30)などのように、徐氏のある個人と特定な主奴關係にある豪奴が存在する。なお、徐仰田は管帳豪奴と呼ばれ、單なる狼僕の高已・徐音等百凶とは區別されている(24)。また沈大爺も徐乾學の掌家といわれた(26)。管家には棍徒一族の族虎褚昭が徐宦に投廁した例(32)や、徐州豐縣の王一虎が管家豪監といわれた例(34)がある。この管家豪監は、あるいは、監生出身のものが身を持ち崩して徐氏の傘下に入り豪奴化したものと考えられる。

次に棍徒。「周圍棉布を盛んに産し、俱に本鎮より貿易し、實に財賦の重地なり」といわれた嘉定縣馬橋鎮の光棍鄒君恆は、「崑山の大官を侍んで泰山、倚るべき長城の護とした」とあり(以上「」は14)、殺人犯地棍許七・許二・許孟華・許孟高・許周等は乾學の惡姪徐君甫を頼り(17)、訟師盛漢宗・盛五、打降胡恩・沈石朝官・陳祥は徐宦の勢を持つて小民を抄没した(2)とあるように、棍徒は勢威ある郷宦徐氏の傘下に入っている。

(C) 門生清客・土官猾吏 甲・乙史料で徐乾學一族と結んだ地方官として、江蘇巡撫洪之傑(甲①、乙①③④⑤⑬)、江蘇按察使(元門生)李國亮(甲③)、松江府知府趙寧(乙②)が指摘されるが、江蘇巡撫洪之傑の動きが目立つ。『檔案』徐乾學では、康熙二八・二九年當時の崑山知縣童式度が巡撫洪之傑ラインで、徐府の子弟門下に投拜し、勢力に趨附して數々惡事を働いたといわれる(1)。鄰縣太倉州では幕客陳相公や知州の宅門⁽⁴⁴⁾(長隨)孫三爺などが徐氏の息がかかった

者で(2)、常州府無錫縣には門生胡豫匡が居り、當縣での徐氏の活動を助けていた(21)。

以上、徐氏の(A)宗族・姻戚、(B)奴僕・棍徒、(C)門生清客・土官猾吏を、一部を除き、その大體を確認してきたが、實は「宗族姻戚は即ち縉紳の耳目なり、狼僕打降は即ち縉紳の爪牙なり、門生清客・土官猾吏は即ち縉紳の心腹羽翼なり」(23)といわれ、(A)(B)(C)三者が相互に結んで始めて郷紳權力が十全に機能しえた。このことを示す『檔案』徐乾學の1には、

(A)宗族……大學士嫡堂弟監生徐昭夏、尙書子黜革舉人徐樹屏 姻戚……尙書婿漢陽令張介眉、父張曾愈、葉宦(廷玉)

(B)奴僕……徐宦家人張乘六・馬英發・吳鉞・陳九、張宦家人蔡峯・徐貴・顧彩、葉宦家人蔣華・邵誕・陳峯即朱俊

棍徒……地棍陳季・蔣華・朱俊、徐府豪棍張乘六(——印は再出||同一人物)

(C)門生清客……徐府門客陳德三・邵賓

土官……崑山知縣童式度

胥吏・衙役……縣吏謝玉、縣書唐燦、縣門子林瑞、縣差徐卿

とあり、同じく2へ計開勢宦・豪奴・衙蠹・訟師・打降の名・住址には、

(A)宗族……徐振紱係相國徐元文姪、住太倉東門外高貞堂河東宅内。

姻戚……錢來琛係粟監加納中書、伊子係相國徐元文姪婿、恃勢嚮民、住太倉州治東。

(B)奴僕棍徒……胡恩住太倉州治東、係豪奴打降首領。

盛五係闖將天罡會首領。住太倉西鐵貓巷。

沈石朝官係綽號、的名沈君甫。係豪奴打降首領、住太倉州治東。

陳祥係訪蠹、違例復入衙門、今現充條總陳延章子、住太倉大西門外。着陳延章要。住西鐵貓巷。

胥二係徐宦第一豪奴、住太倉東門外徐振紱宅内。

費戍住州治東、着胡恩要。

(C) 門生清客

盛漢宗係著名革衿訟師、附會徐、錢二宦門下、恃勢橫行、住太倉西鐵貓巷內。

土官胥吏（衙役）

包祥甫係二班快頭、官名陸祥、今更名包祥、州官耳目、住北史家巷內。幕賓陳相公、內丁孫三爺呼應、萬民大害。

蔣榮先係頭班快頭、官名方升、出入內衙、州官第一耳目、住鎮民橋南大街上朝東。

顧君聖係頭班快頭、官長之耳目、幕賓內丁之呼應、住太倉州治東楊家宅內。

（胥吏）

王聚德係禮房僞吏、州官耳目、闔州稱爲小州官、住南馬巷口。

王聚斌係糧房僞吏、充二十八年折總、王聚德弟、住徐家牌樓頭。^(念)

王聚升係承發書、州官耳目、現收牙行稅、闔州切齒、王聚德弟。

鄒靖公係吏房僞吏、^(州治。)治州西公廨內、內丁出入藏垢之所。

包璋的名包來章、住州治東。

葉公宜係戶房僞吏、官名陳昌信。又兼充承發僞吏、官名陳永賢。係錢宦第一豪奴、萬民大害、住大橋南。

陳朝麻係承發僞吏、錢宦豪奴、官權宦勢、毒害萬民、住太倉大北門外。

楊茂凡係積竈、歷充漕折總、私徵加派、奉前撫洪（之傑）訪革、今仍充二十九年折總、又謀本年漕總、住東港上。

楊殿臣係糧房僞吏、奉前撫洪訪革、今又違例私充、住東港上。

というリストを舉げる。ここで確認すべき點は、第一に二種の檔案ともにその惡事が指摘されるのは直接には舉人・監生・生員クラスの宗族・姻戚であること、第二に(A)(B)(C)相互では、例えば1では徐氏の姻戚關係に應じた形で各官奴僕が活

動していたり、また、奴僕と棍徒とが一體であつたりして、相互關連性が強いことが言える。この相互關連性は檔案2ではより多くの事例がみられ、自己の奴僕を衙門の胥吏に當てていることもある。第三には、郷紳の私的權力が公權たる衙門の各部署に極めて巧みに入り込んでいることである。この點はなお項を改めて検討しよう。なお、以上三點について追加すべきことは、『檔案』徐乾學の二三篇の文書中、徐乾學なり、徐元文なりを直接に惡事の犯罪人としているのは、4（徐秉義）、21（徐乾學）、23（徐乾學以下十五官）、25（徐乾學）の四篇に過ぎないことで、このことは徐乾學等の不正行爲が宗族・姻戚を含めて紳・衿兩身分の合作で遂行されたことを物語る。つまり檔案の多くの事例は徐乾學等の勢威を背景として(A)―(C)の連關で行われたものである。次に、『檔案』徐乾學の1に「蔣華伊親縣門子林瑞」とあり、華宦家人で同時に棍徒の蔣華の親林瑞は縣の門子（衙役）になっており、また、同じく1には、陳峯即朱俊という更名の理由について、

陳峯冒稱前朝苗裔、更父姓改朱俊、結黨煽虐。令妻龔氏日夜簫鼓、繼母厚賂身弟、巧唆身及、離身親屬、將年限未滿之田二畝七分、強增價值、逼伊七十餘歲病母來住身家、揚縊恐嚇。賴詐不遂、投徐府蔽護、捏父詞、結仇棍葉府家人蔣華・邵誕等。

とあつて、これから奴僕（家人）、棍徒、衙門の衙役（門子等）がほぼ一體の、横につながりのある存在と考えられる。なお、『檔案』2では先掲の如く、豪奴でありながら打降の首領をつとめる數人が指摘され、また偽吏の葉公宣は戸房、承發房とわたるうち、その官名をいちいち變更していることなどが注目される。

2 郷紳徐氏の地域支配⁽⁴³⁾

『檔案』徐乾學2（14―15頁）に、

太倉州に一印十州官の呼有り、幕賓に陳相公有り、宅門に孫三爺有り、訪革配徒の今又違例にも復た偽吏に充てらる

王聚德・鄒靖公・王聚斌・王聚升、快頭に包祥甫・蔣榮先・顧君聖等有り、九人連甘し、知州一印なるに、十官詞訟す。

とあって、太倉州の行政は知州一人の手から、幕客・宅門（『内丁、長隨』・胥吏・衙役（『快頭』）九人に移っていた。先掲『檔案』2のリストにも、王聚德は州官耳目で小州官といわれ、王聚升も州官耳目、鄒靖公は内丁出入とあり、また、包祥甫も州官耳目で幕賓陳相公、内丁孫三爺呼應とあり、蔣榮先も内衙に出入すとあり、顧君聖は官長耳目、幕賓内丁呼應とあった。しかし、幕客・宅門・胥吏・衙役の九人はいずれも徐振紱・錢來琛の、ひいては徐乾學等郷紳徐氏の息がかかったものである。この太倉州の事例こそ、正しく郷紳による官府の把持の一具體を示すものである。官府の把持が郷紳の地域支配の一面に違いないが、さらにその具體像を『檔案』徐乾學2によって検証しよう。それは三種に分類されている。

A. 徐元文姪徐振紱が元文の勢を背景として州官・訟師・打降・衙役を働かす不正。

① 一、徐振紱は捕快王吉と構えて賣盜し、良民孫太を陥して盜と爲し、家資一千餘金を籍沒す。孫太無辜にて獄に死す。

冤民孫太の妻唐氏審ぶ可し。

② 一、徐振紱は命を飛假して、九都の郷民唐元易の銀一千二百兩を詐し、慘害傾家す。冤民唐元易審ぶ可し。

③ 一、徐振紱は霹空にも陸懷德の銀五百兩を慘詐す。冤民陸懷德審ぶ可し。

④ 一、徐振紱は句容民張子華を圖詐し、明らかに異郷に欺わり、傾身逐出し、家資三百餘金を籍沒した。一門の老幼、露宿鵬啼し、人人髮指す。冤民張子華審ぶ可し。

⑤ 一、徐振紱は良閨陸氏を強搶して淫姦し、朱德の言觸れ、立刻に打死さる。冤民朱和尚審ぶ可し。

⑥ 一、徐振紱は趙二・趙連を冒認して僕と爲し、銀一百兩を詐す。黃茂公見附して證し、又、伊の妹を強搶して妾と作す。冤民趙二・趙連審ぶ可し。

⑦一、徐振紱は朱招生の女を強姦し、童郎中等平かならず、公言して怒に觸る。僕胥二等五十餘梟を統べ、門を圍んで抄捉し、童郎中を擒えて吊打し、買命銀六十兩を獻ぜしめ、吳子邁見附す。冤民童郎中審ぶ可し。

⑧一、徐振紱は乳母鄒氏を強姦するに、従わざれば、赤體に褻刺し、下身を挖爛す。金氏見證す。冤婦鄒氏審ぶ可し。

⑨一、徐振紱は楊招を圖詐して遂げず、狼僕胥二等五十梟を統べて、家資一百五十餘金を籍沒す。冤民楊招審ぶ可し。

⑩一、徐振紱は吳建周の妻金氏併びに六歳の幼孤とを謀殺し、命田貳千餘畝と血資萬金を謀占す。金氏の兄金天申、甥の爲に毒に觸れ、立ちどころに擒縛されて馬坊に弔され、慘殺重斃す。冤民金天申、金氏審ぶ可し。

B. 白衣中書錢來琛の不正

①一、白衣中書錢來琛の長子錢瀧は太倉州王翰林（揆）の婿に係り、次子錢瀾は徐元文の表姪の婿に係り、三子錢漣は蘇州府宋翰林（德宣）の婿に係り、俱に勢を恃みて重賄囑託し、俱に南場に赴いて、舉人を賣買せんとす。

②一、錢來琛は杜永の家貲五百餘金を籍沒す。冤民杜永審ぶ可し。

③一、錢來琛は錢士誠の家貲八百餘金を籍沒す。冤民錢士誠審ぶ可し。

④一、錢來琛は凌子祥の家貲二千餘金を抄沒し、今に至るも露宿鵲啼す。冤民凌子祥審ぶ可し。

⑤一、錢來琛は顧君懷の家貲一千二百餘金を抄沒す。冤民顧君懷審ぶ可し。

⑥一、錢來琛は陸明甫の家貲三百餘金を籍沒す。冤民陸明甫審ぶ可し。

⑦一、錢來琛は孫三の家貲二百餘金を籍沒す。冤民孫三審ぶ可し。

C. 訟師盛漢宗・盛五、打降胡恩・沈石朝官・陳祥が徐宦の勢を恃み小民を抄沒した惡蹟。

①一、曹秀芝の家貲三百餘金を血糞し、赤掃一光。冤民曹秀芝審ぶ可し。

②一、曹子亮の家貲六百餘金を血糞す。冤民曹子亮審ぶ可し。

③一、楊聖先の家貲五百餘金を血糞し、片瓦も存する無し。冤民楊聖先審ぶ可し。

④一、隆福寺僧子開の什物鐘磬衣貨等件、共に二百餘金を血爇す。冤僧子開審ぶ可し。

⑤一、許文甫の家貨一百五十餘金を血爇す。冤民許文甫審ぶ可し。

⑥一、勢を逞うして凌霄の銀八十兩を爇詐す。冤民凌霄審ぶ可し。

⑦一、顧華の銀二十四兩を詐す。冤民顧華審ぶ可し。

⑧一、命を飛陷に假け、陳貞白の銀一百二十兩を爇詐す。冤民陳貞白審ぶ可し。

Aは徐氏一族の一人が州官・訟師等と組んでいわば全組織を擧げて働く不正で、さすがに種々の形態がみられる。試みに詳細をみれば、無實の良民を犯罪人に仕立て家資を沒收するもの(A①)、恐嚇による金銭詐取(②③④⑤)、強姦に伴う犯行(⑥⑦⑧)、良人を僕と爲し、妾と爲す(⑥)、婦女子殺害と田産・銀錢強奪(⑩)とあり、ここには徐氏一族の郷里における不正行爲の過半のタイプがみられる。なお、Bは①を除き、すべて他人の家資を籍(抄)したというもの、Cもやはりすべて他人の家資を血爇(強奪・詐取)したというものである。ここでは注目すべきは、Bの型に他人の家資を籍沒したとあり、また、ABCのどの一項もすべて被害者が犯罪人(冤民)とされていることである。これは州縣衙門の地方官・胥吏・衙役(特に警察官的な捕快)の機構も私的に支配し、一方、自己の組織陣營に訟師などの訴訟關係の専門家や打降などの私的暴力を加えていた郷紳にして始めて實現できることである。ここに郷紳の地域支配の具體像が窺えるのである。

ただし、以上についてまだ二、三點の追加がある。その一は、先掲甲・乙史料の例えば甲の②にある高利貸し營業、乙の⑥⑨にみられた都市商工業活動の指摘から窺えるように、蘇州や北京での市場支配Ⅱ經濟的支配を徐氏一族は行っていたという點である。この點については、『檔案』徐乾學の26には蘇州閭門吳趨坊に住む徽州人汪震元が徐乾學の黨宦とされているが、彼は乾學の掌家とともに、安慶の當舖、蕪湖の緞店、北京の布業を徐氏が不正に入手する工作をしたという。その二には、今までも述べてきたことだが、徐氏の權力構造はむしろ徐氏の政治的權勢を當として利權に群がる各種

各階層の人々の参加で構成されたが、その中に佃戸層もいたという点である。『檔案』徐乾學15は徐氏傘下の巨棍王子來による土地強奪を告發したもののだが、その附粘單の一項（30頁）に、

惡佃戸王四、苛炙堪えず、別佃に遷るを思い、遂に冒認して家人と爲り、銀八兩を詐す。王瑞伯附證を経る。

とあり、佃戸王四は佃作地を取り上げられるのを思つて徐氏の家人となつたという。ここではこの佃戸は本來の地主（巨棍により土地を強奪された者）から銀八兩を詐しており、複雑な動きをみせている。しかし、いずれにしても、徐乾學一族の不正行爲即地域支配が佃戸層まで参加するものとなれば、その裾野の廣さは極めて大きい。

小 結

兩江總督傅拉塔の告訴は不起訴となつたが、これを口火として江南の生員層や一般民の徐氏批判は高まつた。乾學に續いて大學士を退職（實は解任）した元文はその批判下で病没し、乾學も數年内に死亡した。それでも康熙帝の徐氏一族に對する恩寵は續き、再度の南巡に當つては徐氏宅を訪問し、三兄弟で残つた仲子秉義以下に御筆の匾額御書を賜つた。しかし、徐氏にはもはや往時の勢いはなく、次第に衰亡に向つた。それはやはり徐氏一族の地域支配が地域の批判によつて崩れたと考えるべきものであらう。

註

- (1) 傅拉塔、滿州鑲黃旗人、姓は伊爾根覺羅氏。表記の違い（傅拉塔—傅騰塔—傅喇塔）については、汪宗衍『讀清史稿札記』（中華書局香港分局、一九七七）二二九頁以下参照。
- (2) イエズス會宣教師ブーヴエ（Parle P. J. Bouvet、白進・白晉）が中國に來たのは康熙二七年の明珠黨失脚事件（二月）の直前であった。ブーヴエ著『康熙帝傳』（東洋文庫一五五、後藤末雄譯、矢澤利彦校注、平凡社）の四五頁参照。なお、『康熙帝傳』は、中國社會科學院歷史研究所清史研究室編『清史資料』1、（一九八〇北京）一九三頁以下にも所收。同時代の非漢文史料として参考になる。
- (3) 徐乾學關係の檔案は、『文獻叢編』所收のもの十五件、『清代檔案史料叢編』二二件（但し一件は不詳）であり、しかも前者には脱落や誤字が多いので本稿では専ら後者を史料として用いた。
- (4) 光緒『崑山兩縣續修合志』（以下光緒志と略す）卷二三、列傳二。
- (5) 光緒志卷二六、卓行。
- (6) 光緒志卷二九、孝友。
- (7) 光緒志卷二四、列傳三。
- (8) 科擧の第一試である鄉試に合格しても、擧人の員數に制限があるため、擧人の資格を與えられない者が出たが、その中で國子監に入る者を副榜貢生といった。
- (9) 光緒志卷十九、選舉表三。
- (10) 光緒志卷三一、文苑一。

- (11) 光緒志卷十七、選舉表一。
- (12) 光緒志卷十八、選舉表二。
- (13) 光緒志卷十八、選舉表二。
- (14) 光緒志卷十九、選舉表三、以下科擧關係の史料典據は光緒志卷十七—卷十九。
- (15) 光緒志卷二五、政績。
- (16) 光緒志卷二七、忠節。
- (17) 以上開任の傳は光緒志卷三一、隱逸。
- (18) 光緒志卷三一、好義。
- (19) 顧炎武『亭林文集』卷六、《答徐甥公肅書》に乾學に史學研究の要を教えて「夫史書之作、鑒往所以訓今」という。また、同『亭林詩集』卷三にも「答徐甥乾學」に「孤單苦憶難兄弟、薄劣煩呼似舅甥」の一句があり、顧炎武は乾學兄弟に相當の期待をもっていた。
- (20) 徐乾學以後の八世代の家譜に『徐乾學家譜』零本、東洋文庫藏、一冊、鈔本があり、これには乾學・秉義・元文とそれぞれの子孫の傳が載る。ほかに、韓炎『有懷堂文藁』卷十八行狀に乾學の傳「資政大夫經筵講官刑部尚書徐公行狀」、卷十七行狀に元文の傳「資政大夫文華殿大學士戶部尚書掌翰林院事徐公行狀」がある。本項の徐乾學・秉義・元文の記述は、以上のほか、乾隆『崑山新陽合志』卷二一、人物列傳、光緒志卷二四、列傳三などにより、また『清史列傳』卷九徐元文・卷十徐乾學附秉義、及び『清史稿』卷二五〇徐元文附秉義・卷二七一徐乾學などの傳なども参照とした。

(21)・(22) 奏銷案については、川勝守「初期清朝國家における江南統治政策の展開」(『中國封建國家の支配構造』所收) 参照。

(23) 前註(19)参照。

(24) 以上の徐元文の傳は先掲、韓葵『有懷堂文叢』卷十七行狀による。

(25) 同善會は明末に東林系の高攀龍や陳龍正が組織したものであった。

(26) 以上の徐乾學の傳は前註(20)参照。

(27) 以下の本節の記述は、特に断らない場合、『東華錄』卷十二―卷十五(中華書局刊、校點本『東華錄』一八九―二五四頁)による。

(28) 以下の史料はその主要なものを原文のニュアンスを残しつつ日本語化したのが、口語と文語の混合したおかしな文體となった。その他は要約にとどめた。本史料は校點本『東華錄』二二八―二三〇頁。

(29) 前掲、ブーヴェ『康熙帝傳』四五頁、及び別註三六頁(矢澤利彦氏校注)参照。なお、前掲、『清史資料』1所收の「康熙帝傳」(二〇八頁)で當該個所の四關老に註して明珠・佛倫・余國柱・徐乾學とするのは重大な誤りである。

(30) 校點本『東華錄』二二二―二三頁。

(31) 『清史列傳』卷一〇徐乾學に

時海賊初平、戶部郎中色楞額、往福建檳察鼓鑄、疏請禁用明代舊錢。戶部尚書科爾坤、余國柱等議如所請。上以詢內閣諸臣、乾學言「自古皆新舊兼行、以從民便。若設例禁、恐滋煩擾。……」。色楞額所奏、不准行。

とある。

(32) 以上、『清史稿』卷二七一徐乾學傳。

(33) 以下も校點本『東華錄』二四〇―四二頁。

(34) 高士奇は浙江、錢塘縣人、監生より書寫序班に充てらる。(『清史列傳』卷十高士奇傳)。

(35) 打磨場とは一般的には粉ひき場であるが、ここでは校點本に傍線がある通り地名の固有名詞。

(36) 高士奇の出身地は前註(34)の如く、杭州府錢塘縣であるのにここでは本郷平湖縣という。本郷とは同じ浙江というくらいの使用方か。

(37) 校點本『東華錄』二四三―四頁。

(38) 前掲、ブーヴェ『康熙帝傳』四五頁参照。

(39) 校點本『東華錄』二四五―七頁。

(40) 原文は「乾學于丁卯鄉試、戊辰會試、在外招搖」であるが、『清史列傳』卷十の徐乾學傳には「二七年二月充會試正考官」とあり、また『清史稿』卷二七一の傳も「二七年典會試」とあり、さらに『清代職官年表』第四冊、二七八五頁にも同様の指摘があつて、「在外」の意味が取りにくくなる。しかし徐乾學が科擧試験に影響を及ぼしたことは考えられる。

(41) 校點本『東華錄』二四八頁。

(42) 校點本『東華錄』二四九―二五一頁。

(43) 以下「檔案」徐乾學の檔案史料は第一表の史料番號のみを擧げ、必要に応じて「檔案」の頁數を擧げる。

(44) 長隨については、東京大學東洋文化研究所に「長隨論」という冊子があり、一九八一年四月二日の法制史學會大會(於東京

大學法學部で佐伯有一氏が紹介した。ただし、清初から康熙年間では長隨という名稱は見當らず、内丁とか宅門と言っていた。いずれにしてもこれは地方官の私的な（したがって家人奴僕的な）使役者である。

(43) 重田徳氏「郷紳支配の成立と構造」 岩波講座『世界歴史』

12、一九七一）がいう郷紳の間接的領域的支配の側面である。

(44) 訟師については、川勝守「明末清初の訟師について」（『九州大學東洋史論集』9、一九八二）参照。

(47) 打降（＝打行）については、川勝守「明末清初における打行と訪行」（『史淵』一一九輯、一九八二）参照。

THE TIMES OF XU QIAN-XUE 徐乾學 AND HIS TWO BROTHERS

—A Case of Regional Control Exercised by

Xiangshen 鄉紳 in the Jiangnan 江南—

KAWAKATSU Mamoru

During the tenth month of the twenty-ninth year of the Kangxi 康熙 period (1690), Fulata 傅拉塔, then governor-general of the Liangjiang 兩江 initiated the censure and dismissal of ranking officials, including the chancellor of the Hanlin Academy Xu Yuan-wen 徐元文, and the President of the Board of Punishments, Xu Qian-xue. With the chancellor and president using their authority over the entire Jiangsu 江蘇 region to cover certain unethical acts, the Xu clan had extended their influence beyond their native Kunshan 崑山 district of Jiangsu province. During the Ming dynasty, the Kunshan Xu family members had belonged to the middle and lower ranks of officialdom. But after having survived the period of the Ming-Qing 明清 transition—the time of the three Xu brothers, Qian-xue, Bing-yi 秉義, and Yuan-wen—they rose to the highest positions in the government, advancing from official status in the Hanlin Academy upon winning the eminent *jinshi* 進士 degree, to appointment as a Chinese chancellor and president within a Manchu court.

The decade of the 1680s, following the pacification of the Sanfan 三藩 rebellion, marks the period during which the structure of the Qing court was fixed. And yet several revolutions occurred within the government during this period. During the second month of the twenty-seventh year of the Kangxi period (1688), the faction around the chancellor Mingzhu 明珠 was criticized by the censor Guo Xiu 郭琇 and overthrown from power. During the ninth month of the next year (1689), Gao Shi-qi 高士奇 and his followers were censured and dismissed. The case of the Xu brothers represents the last of this series of official dismissals.

By the authoritative command of the Kangxi emperor, the Xu family was not finally indicted. But shortly thereafter, censure and criticism of

the Xu family continued (from the ninth month of the twenty-ninth year of the Kangxi period (1690) through the eleventh month of the thirty-first year (1692)), this time based both on reports of injury submitted by lower ranking *xiangshen* (including *jiansheng* 監生 and *shengyuan* 生員) in the region of Kunshan and neighboring districts in Jiangsu, as well as reports submitted by commoners. These reports now survive as *dang'an* 檔案 included within the fourth and fifth volumes of *Wenxian congbian* 文獻叢編 (1930), and the fifth volume of *Qingdai dang'an shiliao congbian* 清代檔案史料叢編 (1980). This essay traces the history of the Kunshan Xu family from the Ming dynasty and relates the specific experience of the "Three Xu" under the Qing government. At the same time, in analyzing the historical sources of the *dang'an*, in addition to such records as the *Donghualu* 東華錄, the actual circumstances of the regional control, or territorial control, exercised by the *xiangshen* Xu family was discovered.